

# 水田発祥の地

(すいでんはっしょうのち)



【所在】

鷹栖町 10 線 1 号

【指定年度】

昭和 5 4 年

【標柱建立】

昭和 6 2 年

## 鷹栖の稲作のはじまり

開拓者たちは麦、蕎麦、薯、稻黍、豆類などを主食として生活をしのいでいたが、誰もが米を食べたいという願いを持っていた。

明治 26 年、南部団体と呼ばれる岩手県人下総要太郎他五名が鷹栖村に入植した。この一員であった赤井川村箱石の人、山崎千松は札幌白石村の駒井覚助から早生の種籾五升を譲り受け、沢水を利用して二畝ほどの水田に植え、秋にはどうにか種籾を収穫することが出来たという。これが鷹栖村における最初の稲作であった。

この地帯での稲作は、気象条件から無理と禁止されていたが、以来、次々と試作に成功し、今日の稲作地帯が展開されたのである。現在は基盤整備で圃場は大型化し、当時の面影を見ることが出来ない。この山崎千松は、故郷箱石では米を作ったことがなく、その後の冷害に財を失い、この地を去ったという。

やがて各地で稲作に成功し、近文溝路の開さくがすすみ、千松も造田を大々的に拡げていった。しかし、大正 2 年の大凶作、加えて家族に病人が続き、農耕馬を 1 年の間に 2 頭も斃死さすなど、思わぬ不運が訪れた。遂に後ろ髪を引かれる思いで土地を手放し、芦別市に移住した。大正 6 年頃であったとか。